

# 土器の流通・消費からみた 平安京とその周辺

Heian-kyō and its Outskirts  
Seen through the Circulation and Consumption of Pottery

高橋照彦

はじめに

- ①平安京研究の現況と本稿の方向性
- ②緑釉陶器とそれに類する焼き物
- ③平安京の土器様相
- ④中世京都の土器様相
- ⑤平城京・長岡京の土器様相

おわりに

## 【論文要旨】

本稿では、土器・陶磁器類の流通・消費という側面に焦点を当て、都市とその周辺村落との比較という視点から、平安京とその前後の時期を考古学的に検討した。

まず、11世紀中頃以前の平安京については、緑釉陶器・緑釉陶器素地や黒色土器などの食膳具の比率に着目し、平安宮と平安京は比較的均質であるのに対して、平安京の内と外には明瞭な差異が存在することを導きだした。次に、11世紀後半～14世紀前半頃をみると、中世京都内では土師器や漆器の供膳具が主に使われるのに対して、京外では土師器と瓦器が食器構成の主体を占めることを明らかにし、平安京段階からの延長で京の内外の格差が存在することを確認した。さらに、平安京と平城・長岡の両京とを比較検討した結果、都の内外格差が顕著になるのは9世紀中頃以降であると判断された。

それらのことから、『方丈記』の養和年間（1181～82）の記述に窺われる京都の同心円的な空間構造が食器という生活面の一様相からも読み取れ、さらにその構造が9世紀中頃まで遡ることが推測された。そして、14世紀頃から「洛中辺土」さらには「洛中洛外」という洛中と周辺部を一体化させた熟語が使われるようになるのも、その頃から京内外の食器様相の格差が乏しくなっていくことに典型的に見いだされる生活相の変化と対応するものと考えた。さらに、文献的には明確な都鄙意識が10世紀中頃に成立するとみなされているが、土器からすると実態としての生活落差はより先行して9世紀中頃に画期をみいだすことができ、その頃に都市化としての大きな転換点をみいださうの可能性を提示した。